

明帝国とオスマーン帝国

羽 田 明

和田博徳氏は、「明代の鉄砲伝来とオスマン帝国——神機譜と西域土地人物略——」(『史学』Vol. 31, No. 1-4, pp. 692-719, 1958) という論文で、オスマーン=トルコの鉄砲が明の嘉靖年間(1522-66)に中国へ伝えられ、ポルトガルのそれに勝るものとして名声を博した興味ある事実を明かにするとともに、中国とオスマーン帝国との交通に關説し、これがスレイマーン大帝の時代(1520-66)におけるオスマーン帝国の発展によって促されたものであろうことを論じた。オスマーン=トルコ史の専門家である三橋富治男氏がオスマーン帝国の東方発展を考察したのも、この論文を機縁としたのであった¹⁾。

ただ、オスマーン帝国と明帝国との交通は、和田氏が断定しているように、果して嘉靖3年(1524)にはじまったもので、それいぜんにはさかのぼらないのであろうか。順序として、和田氏の論拠を検討してみよう。

その一つは、明史・卷332、魯迷伝の冒頭に、この年、魯迷 Rūmī, すなわちオスマーン帝国の使節(と称する者)が入貢したさい、給事中や礼官らが「魯迷は嘗て貢せる國に非ず」とか、「魯迷は王会に列せず。その真偽知るべからず」とか奏言したと誌しているのは、「魯迷が此の年に始めて明へ朝貢した」証拠だとみる点にある。

第2は、「弘治五年壬子九月敕建淨覺寺禮拜寺碑記」に、洪武21年(1388)、もと魯密國人の可馬魯丁 Kamāl al-Dīn, 亦卜剌金 Ibrāhīm らがフルン=ブル方面で明の遠征軍に降ったことがみえているが、彼らは「明の前の元朝に早くも来通していたもの」にほかならず、「此の外には嘉靖3年よりも以前に魯迷(密)と明との交渉があったことを伝える記述は一つもない」とする点にある。「明代には、嘉靖3年まで、魯迷國の朝貢がなかったとする先の給事中や礼官等の言は信じて誤りない」という断定も実はこの主張に支えられているのである。

ところで、これらの論拠に対しては、二つの疑問がある。第1には、元末、14世紀の後半に、すでにオスマーン=トルコ人が元朝治下の中国まできていたとすれば、モンゴル世界帝国を再建したといってもよいティムール帝国の時代、とくにティムール没後の

明帝国とオスマーン帝国

混乱を鎮め、東方の明帝国とは親善の関係を保ち、西方のオスマーン帝国とも講和してティムール朝の最盛期を現出した Shāh Rukh (1409-47), Ulugh Beg (1447-49) 父子の時代に、オスマーン帝国と明帝国との間にまったく交通がなかったとはむしろふしぎに思われる点である。

第2には、魯迷の字面ではなくても、嘉靖3年いぜんに、別の訳字でオスマーン帝国の来貢が伝えられているのではないかという疑問である。明史西域伝の哈梅里、哈密の両伝が同じく Hami < Qamul を対象としながら、洪武年間と永楽いごとでは訳字を異にしていることに気づかず、あたかも別々の国であるかのように二つの伝をたてた史官の粗漏は周知のとおりである。皇明実録・正統六年十月乙亥の条によると、黒婁 Herāt は哈烈、米昔兒 Miṣr (=Egypt) は密思兒とも写すと説明されている。明一代を通じて、かならずしも厳密な外国語の音訳法が定まっていたのでなかったことは、これらの少数の例からでも想像できる。弘治5年(1492)の「礼拝寺碑記」に魯迷を魯密に作っているのも、そのころ、オスマーン帝国と中国との間に交通があり、ルーミーを魯密で写したとみる方がむしろより自然ではなからうか。

このような考えから、皇明実録を検索してみると、卷125・永楽二十一年(1423)二月辛酉の条の

肉迷回回哈只阿黒麻来朝。貢方物。命礼部賚之。

という記事がまずわれわれの注意をひく。というのは、肉迷の音は Wade 式では ju-mi であるが、中華人民共和国で現行のローマ字綴りでは ru-mi と写されていて、魯迷(密) lu-mi よりもかえって Rūmī の原音に近く、これをオスマーン帝国とみることに何の不都合もないからである。ただ、ムスリム(回回)といい、Ḥājī Aḥmad (哈只阿黒麻)といっても、それだけでは肉迷がイスラーム教国だということが判るだけで、まだその方位を決定するには不十分だとする慎重論も可能であろう。卷24・宣德二年(1427)一月戊戌の条には、肉迷の回回火者(Khoja)乞(?)の入貢の記事があるが、これも方位問題には何らの手がかりを与えない。

ところが、卷99・宣德八年(1433)二月癸丑の条によると、

以肉迷副千戸哈只阿黒蛮導哈烈等処使臣来朝。陞為指揮僉事。賜誥命。

と誌されている。阿黒蛮がかつて肉迷地(面)の使臣として来朝し、副千戸に任じられたことは宣德二年七月己亥の条にみえている。阿黒蛮はあるいは先きの阿黒麻と同一人かも知れない。ともかくもヘラート等の処の使臣すなわちシャー=ルッ等の使節を案内して再度(もしくは三度)来朝した以上、肉迷が西域諸国、それもホラーサーン以西の

国であることはまず疑いない。しかも、記載の体例から考えれば、ティムール帝国内の一地方でないこともほとんど確実といってよい。肉迷が Rūmī の別訳であり、オスマーン帝国を指すことは信じて誤りがあるまい。

肉迷の遣使入貢のことは、残念ながら、こののち、見当たらないが、巻 108・正統八年(1443)九月丙寅の条には、回回太尉哈三火者肉迷等に諭したことがみえている。哈三火者肉迷は Ḥassān Khoja Rūmī の音訳であり、恐らく瓦剌の強酋也先麾下のムスリムであろうと考えられるが、その名まえから判断すれば、オスマーン=トルコの出身だったのではあるまいか。

ついで、巻 14・弘治元年(1488)五月辛巳の条には、

賜迤西地面鎖魯檀馬哈木。(中略)迤西阿黒麻曲兒干王。迤西日落国亦思刊答兒魯密帖裏牙王。紵糸・磁器・夏布等物。従其請也。

という記事がみえる。迤西の日落 jih-lo 国が何国であるかは判らないが、亦思刊答兒 Iskandar をその王名とすると、魯密はすなわち魯迷で、オスマーン帝国にほかならず、15世紀の後半、ティムール帝国の末期まで、オスマーン帝国と明帝国との間に交通があったことが想像できる。弘治5年の「礼拝寺碑記」に魯密の名称がみえているのは当時オスマーン帝国と明帝国との間に交通があった証拠でないかといったのも、実はこの記事が念頭にあったからである。もっとも、オスマーン帝国の当時のスルターンは Bāyazīd II 世(1481-1512)で、魯密の王名とされている帖裏牙 t'ieh-li-ya とは音声上とうてい一致しない。大方の示教を仰ぎたい。

ウズベク族の侵入によってティムール朝が壊滅し(1500)、中央アジアが一時混乱におちいったこと、同じころ、イランでは、シーア宗の民族王朝サファヴィー朝(1502-1736)が起って、いずれもスンナ宗を奉じる東方のウズベク族、西方のオスマーン帝国の両トルコ族と対立・抗争したことは多少とも東西交通を妨げたにちがいない。

ただ、ティムール朝を倒してマワール=アンナッル、ホラーサーンを占拠したウズベク族はただちに明帝国との通商を開始したようで、皇明実録(巻44)・正徳三年(1508)十一月癸卯の条によると、

撒馬兒罕番王沙亦訶王等各遣馬麻火者等。貢馬駝方物。

といている。サマルカンドの番王沙亦訶はすなわちウズベク族の酋長 Shaibānī Khān(1505-10)その人である。シャイバーニーは、Bābur を援けたサファヴィー朝の Shāh Ismā'il と戦ってメルヴ付近で敗死したが、一時サマルカンドを回復したバールもまた明と通交したことは、皇明実録(巻121)・正徳十年(1515)二月甲辰の条

明帝国とオスマーン帝国

に、「サマルカンドのスルターン把ト兒らが遣使入貢した」ことが誌されているのによっても知られる。Selim I 世がシャー・イスマーイールに勝ち、さらにスレイマーン大帝が Ṭahmāsp I 世 (1524—76) を破って、ジョルジア、アルメニア、イラークなどを併せ、サファヴィー朝を威圧したころになると、オスマーン帝国がさかんに明帝国に遣使するようになったのも当然で、和田氏によれば、嘉靖3年(1524)から明末の万暦46年(1618)までに10回のオスマーン帝国の入貢が記録されているようである。そのうち、ほぼスレイマーン大帝の治世に相当する嘉靖年間が7回、万暦年間が3回である。

このような事情を反映して、16世紀の中葉には、オスマーン=トルコ人で中国へ旅行した者、もしくはイラン人などの西方人でオスマーン帝国と明帝国との間を往来した者が少なくなかったようで、若干の記録も知られている。イラン商人「Hajji Mehmet の中国旅行談」²⁾、オランダ人 Busbeck がイスタンブールで秘教を奉じる一トルコ人旅行者——恐らくデルヴィッシュェ——から聞いた中国旅行談³⁾、トルコ人 Seify の「中国旅行記」⁴⁾ などである。

これらの三つのうち、差当てもっともわれわれの興味をひくのは「ハッジー・メットの中国旅行談」といってよい。ハッジー・メットはギラーン州出身のイラン人で、1550年(嘉靖29)ころ、肅州で仕入れた大黃をヴェニスへきて売りさばいたが、このとき、マルコ=ポーロの『東方聞見録』の編纂で有名な Ramusio が東方諸国語に堪能な友人を介してこのイラン商人から旅行談を聞き、これを筆録して『東方聞見録』の序文中に収めたのである。

ハッジー・メットの旅行談は、大黃や茶についてはじめてやや詳しく伝えた西人の記録であるが、「肅州、甘州以東は隊商は通行できない。往こうとするものは使節という名義ではじめて大明汗 Daimir Can の延(すなわち北京)へ行ける」といって、いわゆる朝貢貿易の実態を明かにしているほか、当時の交通路、交通事情についても注意すべき説明を与えている。そのいうところによると、往路には Tabriz, Sulṭāniya, Qazwīn, Varāmin, Herāt, Bukhārā, Samarkand, Kashghar, Aqsu, Kucha, Chalish (=Karashar), Turfan, Hami, 肅州という普通の隊商路をたどったが、帰路には、オスマーン帝国と同盟してサファヴィー朝 Soffi を討とうとしていたウズベク族 Iescilbas=Yešil-baš の諸酋長がたまたまイスタンブールへ派遣した使節の一行と同行して、カスピ海北岸を廻る道筋を取り、Caffa でこの一行と別れたらしい。これはイランを隔てた東西のトルコ族の間に北方の草原路を経由して交通が行われていた

ことを示している。カザフ族にせよ、アストラハンやクリミヤのタタール族にせよ、旧キプチャック=ハーン国系のトルコ族の住地は、ウズベク族にとってばかりでなく、同宗派同民族のオスマーン=トルコ人にとっても往来が容易だったのであろう。オスマーン帝国と明帝国との交通については、このような事情も考慮されねばならない。

この小稿を草することを思いついたころには二つのもくろみがあった。その一つは、明代の中国人がその優秀性を認めたオスマーン帝国の鉄砲が果してどのようなものであるかを実物について確かめることであった。他の一つは、オスマーン朝もしくはティムール朝の史料のうちから、オスマーン帝国と明帝国との交渉に関係のある根本史料を探し出すことであった。しかし、まだイスタンブールへいく機会に恵まれず、こちらの二、三の専門家に尋ね合せても、史料発見の手がかりさええられなかった現在では、手もとの僅かな心覚えを頼りにして小篇をまとめることで満足しなればならなかった。宮崎教授をはじめ、読者諸氏の寛恕をえられれば幸である。

(1965年2月4日、パリにて記す)

(筆者は京都大学教養部教授)

註

- 1) 三橋富治男：「十六世紀のオスマン・トルコと中亞，南露周辺」(『史学』Vol. 36, No. 1, pp. 37-65, 東京 昭38)
- 2) H. Yule and H. Cordier: Cathay and the Way Thither, Vol. I, pp. 290-296.
- 3) *ibid.*, pp. 296-298.
- 4) Abdoul Kerim: Histoire de l'Asie Centrale, traduite par Ch. Schefer. 巻末付録

追記 本稿脱稿後、飯塚浩二教授から、近著『東洋への視角と西洋への視角』(1964)を頂戴した。そのうちに、“「鉄砲」文明論」という一篇があって、「神器譜」の著者趙士禎が日本銃、西洋銃、トルコ銃の優劣を論じた部分を取上げ、次のように論じられている。「明代の『神器譜』にいうところの西洋銃とトルコ銃との点火の機構をくらべて目立つちがいは、前者の鵝頭(火ばさみ)が手前へ倒れる仕組になっているのに、後者は——そして種子島銃の場合にも——向うへ倒れるようになっている点である。堺の元鉄砲鍛冶屋敷町の旧家に保存されている各種の和銃にしてもそうである。もう一つ、西洋銃では射撃の際、銃身を叉杖架に托する例が多いし、またいかにもその必要がありそのような重い銃が多いように思われるのに、和銃については、寡聞にして架杖使用の例を私はまだ知らない。『神器譜』の西洋銃の図説には 叉杖架への言及はないけれども、特に「托手」の使用が明記されている。トルコ銃、西洋銃といってもいろいろ種類があ

明帝国とオスマン帝国

り、性能、用途のちがいがあって、同書に図解されているものは、おそらく両方とも比較的携行に便利な、どちらかといえば軽量のものであったろう。敢えていえば、銃身の長短からしても、トルコ銃の方が騎馬の遊牧民のあいだで発達した型式であるように思える。……」。文献的な、とくに「神器譜」にもとづく理解としては、一応このように考えて差支えなかろう。しかし、「日本銃より便で、しかも射程も威力も日本銃の数倍である」というトルコ銃の実態を知ろうとすれば、飯塚教授もいわれるように、イスタンブールのトプ=カプ=サライ博物館に多く保存されているトルコ銃を精査して、その結果を西洋銃、日本銃と比較検討するいい方法はあるまい。

(1965年6月20日)